

本書に通底しているのは、左脳の思考から生み出されるDSM一辺倒になった操作的診断基準に基づく精神医学・精神医療への批判である。

DSM時代が長期化する中で盲点を突く本書は、エヴィデンス嫌いの一部の精神療法家やエヴィデンスの限界を識る脳科学者だけでなく、DSMに馴染みある精神科医・公認心理師・その他多くの臨床家・研究者にも読んでいただきたい書である。き

●アラン・N・ショア著（筒井亮太、細澤仁訳）

『無意識の発達』

精神療法、アタッチメント、神経科学の融合

本書は、以前、評者が本欄で取り上げた同著者による『右脳精神療法』（三三三号、二〇一九）の姉妹本として同時刊行されたものである。

著者は神経精神分析家として、精神分析的な精神療法の実践とともに、それを裏づける神経生物学的研究を精力的に行ってきた希有な「臨床家＋科学者」（ショアは自らのアイデンティティをこのように称している）である。彼の主張の根幹には、

つと、彼ら・彼女らの右脳が活性化されるはずである。

さて、明日も右脳を十分に働かせるためにはきつと徹夜は禁物だろう、そろそろ寝ようと思う。寝る前に、おまけの三日間の執筆時間を授けてくれた右脳機能の高い編集者に感謝。

加藤隆弘

（かとう・たかひろ／九州大学）

の成熟途上の右脳の組織化を促すことを、最新の知見を駆使しながら論じている。生後一年半に形成されるべき右脳の感情調整機能の不全が後に発生する精神病理の大半の病因とみなされ、右脳の構造と機能の関係は無意識過程そのものを意味する。よって、われわれ臨床家や科学者は、無意識過程を掴み取ることによつてこそ、望ましい治療の展望が拓ける。本書名『無意識の発達』にはそのような彼の思いが反映されている。

『右脳精神療法』は、主に重い精神病理を持つパーソナリティ障害患者に対する精神療法を「情動」と「関係」に焦点を当てて論じたものであるが、本書はそれとはまったく趣を異にし、自閉スペクトラム症とアタッチメントの問題を中心に、著者自身の現時点での考えを論じたもので、一見しただけでは、書名『無意識の発達』からは想像もつかない内容である。

本書を評者がぜひとも紹介したいと思つたのは、発達障害とりわけ自閉症を論じる際に、安易に「脳障害を基盤に持つ」との枕詞が用いられ



日本評論社 2023年
4200円（税別）

てきた風潮に対する強い疑問があったからである。これまで自閉スペクトラム症に関する病因論には、母原病とまで言われた心因論から脳障害を基盤に持つという「器質論」へと二転三転してきた歴史がある。しかし、評者も以前本欄で取り上げた（鷲見聡著『発達障害の謎を解く』の書評、二五号、二〇一五）、今ではエビジェネシス（後成説）という考えがコンセンサスとなっている。

そうした動向は、世界の精神医学界が主導し、今なお多くの精神科医をはじめとする臨床家が汎用している操作的診断基準に根本的な疑義さえ生んでいる。その診断体系が最新の神経生物学や遺伝学の知見と整合性をもたないとの理由から根本的な変更を余儀なくされようとしているということがある。その中核にあるのは現在の病態を複雑な遺伝・環境要因と発達の段階によって生成され

たものとして捉える視点である。子どもに限らず患者の病態を関係（遺伝と環境、つまり病む当事者とそこに関わる人たち）の文脈で捉え、そこで起こっている事象の意味を発達過程に位置づけて考える視点である。診断の根拠とされる種々の病像は、けつして生来の脳障碍から直接的に因果的に生成されるのではなく、乳児期の養育者とのダイナミックな関係の相対で生じるということである。つまりはエビジェネシスの重要性である。

本書はこの点について、これまでの多領域に及ぶ膨大な神経生物学的研究を渉猟しながら、最新の臨床的知見との整合性を見極め丁寧に論じている。そこで著者が最も強調しているのは、これまで「生来的な脳障碍」と安易に言われてきたことに対して、「妊娠期間中の出生前および周産期の環境上の難題は、胎児の脳に有害な後成的（評者訳…エビジェネティックな）変化をもたらし、自閉スペクトラム障害のリスクなどの長期発達に影響を与えるだろう」とし、胎生期、とりわけ最後の三カ月から生誕後一年半の期間の養育環境

の影響を重視する。その論証として取り上げているのが神経生物学的知見としての乳児にみられる「右扁桃体肥大」である。ヒトは自らに危険が及ばないか、周囲の状況を窺い、生存が脅かされそうだと察知すれば、即座に闘争・逃走反応が引き起こされる。こうした情動的価値判断を担う扁桃体が病的肥大を示していることは、彼らが（出生前から）周囲に対して異常なほどの恐怖を抱いてきたことを示唆する。

さらに著者は右脳の成熟過程の性差に着目し、男児は女児に比して、その成熟過程が著しく遷延化し脆弱であるゆえ、種々の精神病理を発生しやすいことを論証し、注意を喚起している。

著者は今後の課題として「現在、愛着障害を経験する子どもの大半が自閉スペクトラム障害を発症することとはなく、愛着障害のほうから自閉症よりもはるかにありふれた病像であるという形でコンセンサスが取れています。とはいえ、どちらの分野でも現在では後成的（評者訳…エビジェネティックな）視座が採用されており、少なくともある精神神経生物

学的な共通病因子を共有している可能性が示唆されています」。このことから、発達早期評価の調整モデルを、発達早期に現れる神経生物学的障碍と重度の発達精神病理の双方を示す、もう一つの第1軸「発達障碍」の自閉スペクトラム症に適用することで、生後一年ないし一年半の期間の早期の評価と、介入の必要性を主張する。

評者が母子ユニットを創設してこの時期の母子関係評価を実践して得た最大の成果は、生後一年から一年半の期間では、母親に甘えられない子どもの不安は表向きわかりやすいかたちで表出されることが多いが、生後一年半を過ぎると、次第に不安は消退し、それに変わって不安の防御として多様な対処行動（われわれが症状として捉えている行動）が前景化するということである。評者がショアの著書を自らの臨床研究の応援歌だと感じた理由はそこにある。

以上から言えることは、生後一年半から二年の間に、つまりは不安への対処行動がまだ固定化されない時期に早期介入すれば発達障碍、さらには多くの精神障碍の発症を予防

することが可能になるといふことである。こうして考えていくと、操作的診断基準をもとに診断してからしか治療や研究を始めることのできないような今の精神医学の現状は悲劇というしかない。

著者がこれからの課題として自らに課しているのは、自閉症ならびにアタッチメント障碍を対象とした研究である。評者は、臨床家として発達障碍研究から出発し、次第に精神障碍全般へと関心が広がっていった。ショアはそれとはまったく逆の流れで発達障碍へと関心が広がっている。そこに評者は親近感を覚えつつ、今後の著者の研究のさらなる進展に期待したい。

（原書：Schore, A. N.: *The Development of the Unconscious Mind*. Norton, 2019.）

小林隆児
（こはやし・りゅうじ／感性教育臨床研究所）